

平成二十七年

陶人 野口以織

と 粹人 仲森智博

二人展



壽庵

GALLERY JUAN

伊勢屋美術 ■
東京都杉並区
西荻北 4-5-22
〒167-0042
TEL & FAX
03-3399-2756

陶工あらすじ

野口以織

わが工房は神奈川県・丹沢山塊、標高三百メートルの斜面にへばりついている。冬はつらい。ロクロ仕事はまあいいけれど、釉薬掛けは手がしびれる。釉薬は、水に溶いた石と土、それに灰が加わるといふ原始的なものだ。それを入れる釉桶の中は凍っている。しかも釉薬の材料は沈殿しているから、よく攪拌せねば使えない。この重たく凍った液体に手を肘まで入れながら、因果な職業に就いたものだとわが身を嘆く。でも昔の陶工はもつと凄まじい作業ぶり

だったろうなどと、慰めてみたりもする。

若い頃は、図案屋をしていた。秋から冬に掛けては広告作りに追われ、布団で眠れないほど忙しかった。そんな時、友人が訪ねてきて言った。「ストレス解消には土いじりがいいぞ」と。さっそく画材屋さんへ走り、カチカチに乾燥した粘土を買ってきた。それが、わが陶芸の始まりだ。人に教えるを乞うことを嫌う生意気な青年は、以後、独学で焼物屋を目指す。始めて一年もしないうちに電動ロクロを放り出し、手回しに変えた。若き見習陶工にとって、志野や織部といった桃山陶はまぶしすぎる存在だ。それを作った



1 大井戸茶碗

素地土は韓国産カオリン主体だ。粘り少なくロクロ引難しいが、この枇杷色を出すには欠かせない。



昔の美濃陶工は手回しだったと知り、それだけの理由で採用を決めたのである。

順風が吹き続かないのが人生だ。陶芸を始めた五年後、この地に移り「以織窯」を開窯した。そして、ようやく近隣に聞こえるほどの窯場になったかと思つたのもつかの間、突然左腕が利かなくなった。頸椎椎間板ヘルニアが与えられた病名だった。廃業も考えた。だが、生まれつきの楽道家、リハビリを兼ねて人が出来ないことをやってやろうと、「最高の茶碗」である井戸茶碗に挑むことになるのである。十三年前のことだった。

井戸茶碗は、約五百年前、李氏朝鮮国で焼かれたといわれる。素地土は不明だった。近年、韓国南部の港町、現在の鎮海市近くの頭洞里で井戸茶碗を焼いたとされる窯跡が発見され、発掘陶片の分析結果からわかったことは、付近で採れたカオリン土を使つたらしいということだ。韓国ではカオリン土が採れ、それゆえ良質な焼物ができたとされる。わが窯でも韓国産のカオリン土を使うのだが、これがなかなかやつかいなのである。まず、作業が大変だ。カオリンの原土を乾燥させてから、叩いて細かくする。作るものに応じて篩の目を変えるのだが、練る前に一部を煨焼する。生の土だけでは乾燥切れをおこしてしまうからだ。乾燥切れとは、水分を含んだ土が乾く時、収縮率が大きく乾燥中に割れてしまうことをい

う。ちなみに、日本の陶芸土の収縮率は焼成後十五パーセント以内だが、生のカオリン土は二十パーセントも縮む。ただでさえ粘りの少ないカオリン土に粘性を奪つた煨焼物を混ぜるのだから始末が悪い。まともにロクロなど挽けやしない。最初は粘りを増やすための材料土を加えて挽いた。その材料土を徐々に減らしていき、三年ほど経ったころ、ようやく挽けるようになった。

ただ、挽けただけでは井戸茶碗にはならない。難関は、カイラギの再現である。カイラギは梅花皮とも書く。言い得て妙だ。井戸茶碗の粗い素地土と通常より縮む釉薬が呼応して、高台周りに焼成後独特の釉縮れ模様が出ることを指す。井戸茶碗を井戸茶碗たる所以のものにしているのがこのカイラギだ。志野の柚子肌に似ているが、良質のカイラギは卵の殻が砕かれたとき感がある。今でこそ釉薬を掛ければカイラギの種が生まれ出るが、始めた頃は皆目見当もつかない。ある種の停滞感のなか、未完成の拙作を掲載したサイトを見たという方から、ある日メールが入った。拙作を見たいというのだ。それが今回の「以織・智博 二人展」の出発点だ。メールの主は仲森智博氏だったのである。知る人ぞ知る才人・仲森氏の紹介は今さらしないが、氏こそ拙作茶碗の師匠である。もちろん氏はロクロ引きなどしないが茶の湯に対する深い造詣と独特の視点で導いてくれる。

3 小井戸茶碗

土が変わると焼き上がりの表情も変わる。幾度もの試行で、こんなに柔らかな肌に焼き上がった。



「全体的には枇杷色をしている井戸茶碗だけど、表面の釉ガラスは青味がありますよね」「そこを衝くのか仲森さん、わかっているけどおいそれとはいかないんだよ」。心で叫びつつも「ハイやってみます」と元気に応える。

これで決まった。今年の課題は相反する釉色を一碗の中に共存させることだ。地球上で一番多い金属は鉄。井戸茶碗の発色はこの鉄に由来する。釉薬中に僅かな鉄分が焼成中に十分酸化されると枇杷色に発色するのである。逆に焼成中、酸素を奪われて還元されると鼠色に発色する。前述のカオリン土は還元されにくいので、焼き加減によつては還元焼成でも枇杷色のままで焼けてくる。それに反して炎に直接さらされる釉薬は、自身の持つ僅かな鉄分と素地中から吸い上げた鉄分の影響で、青味かかったガラス質になる。

どうにか今年の課題は成し遂げたようだ。さあ、来年はあの御仁、どんな無理難問を押し付けてくるのだろう。

4 蕎麦茶碗

鼠色と枇杷色が一碗に同居するよう意識的に焼き上げることは不可能。偶然を予測して窯に詰める。



5 御本茶碗

上の蕎麦茶碗同様、二色が同時に発色するのが御本茶碗の特徴。その発色具合で表情が変化する。



6 絵御本茶碗

磁器ではなく陶器に空間を大きくとって呉須で描く。器形と絵付けの雰囲気は志賀焼に倣った。



「まあ、石モノは売れませんが、さっぱりですなあ」

ある茶陶作家の方がそう嘆いておられた。石モノとは磁器のことである。

日本人は、陶器、いわゆる土モノが大好きだ。その傾向が顕著なのが「侘び寂び」を標榜する茶道の世界においてである。茶碗は「一楽二萩三唐津」といい、「高麗茶碗」は格別という。それらはみな陶器だ。「使われ、やつれてきたところに美を見出す」という茶道の美意識にかなうからだろう。茶碗は使えば茶が染みる。それを茶人は「育った」と褒め、シミを景色と呼び喜ぶ。

陶器の方が味わい深いという感覚もありそうだ。茶道具では製造時にできた歪みやムラも鑑賞の対象になる。完璧なフォルムより少しとぼけたような姿を好み、不均一で自然さを感じさせるものに愛情を寄せる。

ただ、例外的に愛され続けてきた磁器もある。一つは李朝ものの白磁や染付、もう一つは古染付と呼ばれる作品

7 菊の絵茶碗

京焼にありそうな菊の絵を染付で描く。焼成時に煤が入ったが、それが霞のようにも見える。



群だ。どちらも、どこか陶器に似ている。李朝白磁は育つし、古染付にはぼつてりした磁器らしからぬ稚拙味がある。こうした、かつてはできていた、磁器なのに陶器的な味わいのある器が作れないか。それが以織さんと私の新たな挑戦である。以織さんは土モノしか作ったことがないという。それがいいと私は思う。その以織さんが挽いた器に、素人の私が絵や文字を描く。

製法は、高麗茶碗と同じ、李朝白磁や古染付とも同じ「生掛け」である。素焼きはせず、乾燥させた素地にそのまま呉須で絵付けをしていく。現代では誰もやらなくなったような製法だが、うまく焼けると格別の味わいが生まれる。ただ、なかなかうまく焼けてはくれない。一割もとれるかどうか。苦勞して成形し絵付けをした作品のほとんどが不良品になるのである。

高みを目指そうとすれば、それだけ道は険しくなる。まあ、世の中万事、そんなものであろうが。

(智博記)

8 染付万葉歌茶碗

一見すると漢詩のようだが、「大和には群山あれど」で始まる万葉歌。舒明天皇の、国見の歌である。



9 染付ドラ鉢

無一物中無尽蔵の賛。樹林だけを描き、山や水、人物など山水画の要素は空想の世界に押し出した。



10 曜雲井戸

伊勢屋美術・猪鼻氏の命名になるこの茶碗。見込み側にも満天の星空が広がっている。



井戸釉薬を使用して焼いた茶碗だから「御本手井戸」と呼ぶべきか、カイラギのある御本手と見て「カイラギ御本茶碗」とするべきか迷うところだ。そこへ伊勢屋美術店主の猪鼻徳壽氏から「曜雲（せいうん）」との名前が届く。「曜雲井戸」。いい響きではないか。新しい試みは常なることだ。しかしして製品になるものは少ない。この茶碗の出現で、以後同様のものを窯詰めしたけれど、こんなに豊かな曜雲が表れたのは、この一碗だけだった。窯変と言つて、これは炎が気まぐれに作る景色だから、基本的にコントロールできない。期待しての窯詰めは工夫するが、あとは窯の神様次第なのである。神様のご機嫌をあれこれ取るが、思い通りに応えてはくれない。李朝茶碗にはこの御本手と呼ばれる窯変模様と、片身替りと言つて、一碗のなかに還元鉄の鼠色と、酸化鉄の枇杷色が分かれて存在するものがある。鉄は一番身近で多彩な発色材である。

（以織記）

桃山時代的美濃陶を代表するものの一つに黄瀬戸があり、釉肌の違いから菖蒲手と油揚手に分けられる。菖蒲手は線彫りにて菖蒲文様の描かれた輪花鉢からの命名という。油揚手は油揚げと見まごう肌をしており、六角形をしたぐい呑みに多い。ただなぜか、陶磁器の解説書でも菖蒲手と油揚手を混同していることが多い。この茶碗は美濃のもぐさ土を使って焼いたもの。菖蒲手の部類に入る。黄瀬戸釉薬には灰分が多量に含まれるので、焼成後テカリが出るはずだが、菖蒲手には釉薬中に粗粒珪石が含まれるため、しっとりとした焼き上がりになる。しかし、この効果は底面、しかも鉢のように底面が大きい物に限られる。その表情が垂直面にも出せたらとの思いから工夫してみた結果がこれである。（以織記）

11 黄瀬戸茶碗

以織窯陶工・小宮加津子の作になる。優しいフォルムがしつとりと手に馴染む。手取りは軽い。



12 黒刷毛目茶碗

抽象画家の小野忠弘先生に「見ずに描け」と教えられた。それを思い出しつつ描いてみた。



高麗茶碗のなかで異質な御所丸茶碗。日本の織部茶碗そっくりな杳形と特有の胴にある溝。「古田高麗」の銘を持つ最も古い御所丸の存在から、織部の影響は当然だが、あの胴の溝はロクロを挽くうえで意味がありそう。どうにもならない事情があつて、それがむしろ造形に寄与したのではなからうか。

調べたら御所丸茶碗の胎土は粗い磁器土だ。素地土を作り、何個かロクロ引きするうち気付いた。この胴を廻る溝は指でついたものだ。けつして「付けた」ものではない。理由があつて、付くしかなかったものだと。

井戸茶碗をはじめとする高麗茶碗のロクロ挽きでは、最後に器体の腰部に残る土を篋で押し広げる。こうすれば、次の作業である高台部の削りが短時間で済む。高台内を削ったあと、腰

13 御所丸茶碗

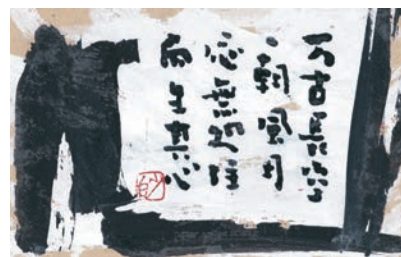
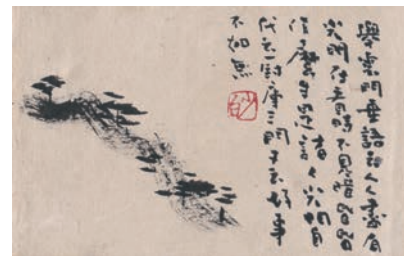
磁器質の素地ゆえにできるフォルム。高台削りは一気呵成に処理をした。



回りをカンナで一周削るだけで茶碗の形ができあがるのだ。こうしたロクロ術で御所丸のような半筒形を挽くと、最後の腰部を伸ばすとき、しつかり腰部を支えねばならない。もう十分伸びきっている上部を崩さないためである。支えた結果として、御所丸の胴に溝が一周することになったのであろう。(以織記)



書と画 仲森智博



3点 横141㌢ 縦90㌢



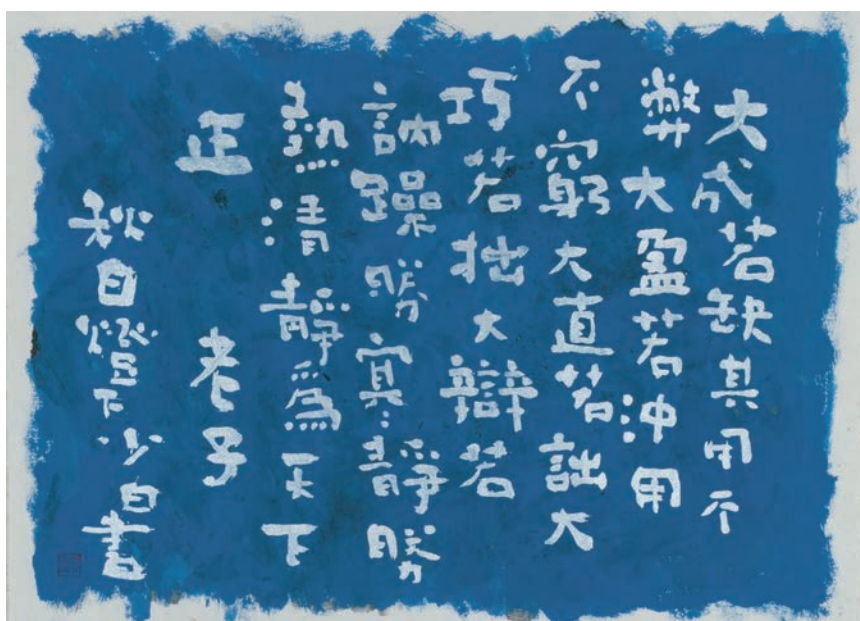
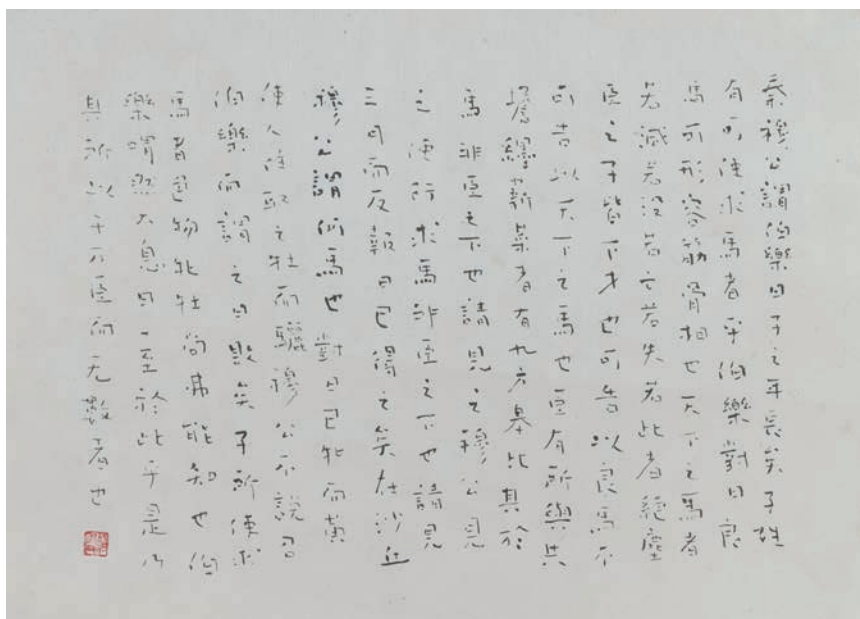
実に不気味な子供であった。国宝図鑑をながめていれば、玩具やテレビは不要なのである。大好物は仏像、そして室町期の水墨画であった。あぐくの果てに父の硯箱を持ち出し、雪舟の名画の模写まで始めた。

小学四年生のときのことである。母が個展で一枚の絵を買った。その作者こそが、わが師となる曾我青峰氏だった。個展を終えた師が買約していた作品を納めに訪ねて来た。お茶飲み話に母が例の雪舟を見せると、師は「私が教えましょう」とその場で申し出たらしい。師匠の押し売りである。

弟子入りの際、両親に求めたことは一つだけ。山ほど上質な色紙を用意することだ。普段から本番用の色紙に描かせ練習用の半紙は使わない。失敗をおそれさせないためだという。私の傍若無人ぶりは、師の教育方針によるもののようなのだ。

その師との交流は十年に満たない。高校卒業の年、現代水墨派展に出品、師の後押しで入選させていたのだ。その会場である東京都美術館に呼び出された私は、一日中師に連れ回されたものだ。高齢の門人や知人に「これがワシの一番弟子でな、まだ十九歳で早稲田の学生なんじゃ」と紹介し相手を驚かせるのが楽しくて仕方がなかったらしい。

その翌年、師は逝去し、私は描くことをやめた。それから三十五年以上を経て筆を持つ私をみて「画家など目指すな、一筆お願いしますと言われる人間になれ」と口癖のように言い続けた師は、天上で苦笑されているに違いない。(智博記)



2点 横432㌢ 縦315㌢

さけ呑み 六種

右から染付間道、染付万葉歌、染付波千鳥図、御所丸、黒刷毛目、井戸の各さけ呑みである。



野口以織 のぐち・いおり

- 一九五〇年生まれ
- 一九八六年 陶芸を志す
- 一九九一年 現在地・丹沢山麓に
「以織窯」開窯
- 二〇〇四年 頸椎椎間板ヘルニア発症を機に
井戸茶碗研究に没頭
- 二〇一二年 伊勢屋美術ギャラリー・壽庵にて
「以織井戸」初個展
- 二〇一三年 伊勢屋美術ギャラリー・壽庵にて
第二回「以織井戸展」
- 二〇一四年 ギャラリー・壽庵と御茶道具眞泉堂
にて同時開催
- 「以織窯新作展」
- 二〇一五年 岐阜市・石原美術にて
「野口以織・仲森智博二人展」



仲森智博 なかもり・ともひろ

- 一九五九年生まれ
- 一九七〇年 画家の曾我青峰先生と出会い弟子入り
- 一九七八年 東京藝大を目指すも挫折、理系に転向
- 一九七九年 早稲田大学理工学部入学
- 一九七九年 現代水墨派展入選
- 一九八〇年 曾我青峰先生逝去、絵画の道から離れる
- 一九八四年 電機メーカーの研究所に入所
- 一九八九年 出版社に転職、ジャーナリストに
このころから茶道と古美術収集に傾倒
- 一九九五年 古美術をテーマとした初めての著作
- 二〇一二年 野口以織氏と出会う
- 二〇一三年 早稲田大学客員教授を兼務
- 二〇一四年 以織氏と染付作品の試作を始める
- 二〇一五年 石原美術にて
「野口以織・仲森智博二人展」



小宮加津子 こみや・かづこ

- 一九四七年生まれ
- 一九九一年 「以織窯」開窯を機に同窯陶工のひとりとなる
- 以後「以織窯」にて織部、黄瀬戸、
絵唐津等の製作をする
- 二〇〇四年 以織の病発症を機にアシスタントして
研究を支える
- 二〇一四年 「以織窯新作展」へ黄瀬戸を出品
- 二〇一五年 「野口以織・仲森智博二人展」へ磁州窯手・
黒釉掻き落とし作品を出品

陶人野口以織と粹人仲森智博 二人展

写真 森仁
編集 金子和生

会期 平成二十七年十一月二十八日から十二月六日
時間 十一時から十九時
伊勢屋美術・ギャラリー・壽庵 猪鼻徳壽
東京都杉並区西荻北四一五一二二二
TEL/FAX03-3399-2756
E-mail iseyajuan@nifty.com
ホームページ: <http://www.iseyajuan.com/>

